

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372300980		
法人名	医療法人 社団 井上会		
事業所名	みんなの光		
所在地	熊本県熊本市南區城南町今吉野806-1		
自己評価作成日	平成29年1月26日	評価結果市町村受理日	平成29年3月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5
訪問調査日	平成29年2月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

小高い丘の上にあるホームからは眺望がよく、ホーム全体桜の木に囲まれ春になると見事な花が咲きほこり、すぐ側で春を満喫できます。又、春ばかりでなく四季の移り変わりも楽しめます。ホーム内は広々としたリビング、車椅子がすれ違える広い廊下、3カ所のトイレ、広々とした浴室とすべてがゆったりとした造りになっていて、更にバリアフリーとなっている。又、生活する上での行動範囲内にはすべて手すりがついていて安全である。入居の際は一時金もいらず、毎月の利用料金も安い。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

熊本地震の際は、夜勤職員の冷静な対応で入所者全員が怪我することもなく、無事隣接する母体法人の病院に避難し、災難を乗り越えている。この体験をもとにその後の避難訓練はより臨場感をもって実施している。また、毎月全職員が参加して行う職員会議は、日々のケアを振り返り、決まりごとの確認や情報共有を行っており、職員が一堂に会することで、課題を共有し、チームワークを醸成している。運営推進会議では、会議の位置付け・意義を解説し、外部評価の目的等についても説明するなど、日頃は馴染みの薄い事柄について周知に努め、積極的な意見交換を行いホーム運営に役立っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	一ヶ所だけでなく目に付く所に「理念」を掲げ、日頃より意識付けし、申し送り時や勉強会時に方針や目標を話し合い「理念とはなんぞや」を職員に理解してもらい、それに沿ったサービスを提供していることを確認しあっている。	新任職員には、理念に込められた思いを伝え、ケアの根拠とするように指導している。毎月の職員会議では、理念に沿ったケアの提供について確認している。また、運営推進会議の配布資料には毎回、理念を記載し、周知に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の一員としては、毎年法人全体で小学生のキャンプや園児の慰問等受け入れたりされる中に参加させてもらっていたが、法人も地震で受け入れる場所がなく行事行われず。又、ホームの東側は住宅地の為洗濯物干す際、挨拶など積極的に行っている。	地域とのつきあいは、主に母体法人が中心となって行われている。隣接する老健施設に小学生のボランティア訪問がある際には、ホームへの立ち寄りを依頼し、入所者との交流を図っている。しかし、ホームは高台に位置しており、近隣住民との日常的な交流は限られているように見られた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症への偏見や差別を無くすことの重要性を認識し、運営推進会議等に地元のお世話される方ばかりでなく、近隣の自治会長さん等に出席を呼びかけ理解して頂き、地域貢献につながるよう努力している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回会議を開き、ご家族も話し易いよう一回に二家族以上参加してもらい、近状報告やサービスの実施等について報告し、更に区長・民生委員・ご家族の方に意見要望をお聞きして話し合いを行い、ご希望に沿ったサービス提供が出来るよう努めている。	運営推進会議の意義や、外部評価等についてホーム長が参加者に説明し、意見交換が活発に行われている。また、入所者の声や、家族からの要望も出され、検討の結果、傾聴ボランティアの活用に繋がった例もある等、運営推進会議が活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	当法人の担当者は総合支所へ赴き相談等している。又、支所の担当者が代わられて当法人へ挨拶があった時はグループホームに寄って頂き、ホーム内を見学して頂いたり現状説明等を行っている。書類提出の際は、出来る限り時間を作って郵送せずにご挨拶するよう努めている。	市町村との連携は、主に、母体法人の担当者によって行われている。尚、入所者の生活保護に関する手続き等に関しては、ホーム長が市町村担当窓口に出向き、必要な情報が十分に得られるよう、協力関係の構築に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束マニュアルの11項目の具体的な行為を理解しケアを実践している。玄関の施錠は夜間のみであり、居室の鍵も昼夜とわず施錠していない。言葉による拘束にも日頃から充分注意を払っている。 1/8	法人が開催する身体拘束に関する研修に職員の参加を促し、意識醸成を行っている。認知症周辺症状による行動への対応や言葉かけ等について、ケースごとに話し合い、身体拘束をしないケアの実践に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修や院内研修で学び、職員一人一人が注意するよう心がけている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	母体法人の支援相談委員から制度について学び、利用者の状況を話し合い、必要性の有無を話し合っている。現在お一人の方に成年後見人がついておられる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書に印を頂く際、必ず内容を詳しく説明し同意を得ることを基本としている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的な運営推進会議の他、家族訪問時は入居者様と会われた後、事務室に来ていただき、近状報告する際意見要望もお聞きしている。又、苦情相談窓口も設けており、ご意見箱も設置している。	運営推進会議には、二家族が順番に参加することとし、意見や要望を表せる機会としている。また、毎月の支払は、ホームへの持参を依頼しており、家族と職員が情報や意見を交換する大切な機会としている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日の申し送りの中などで発言する機会を設け、実態を把握し提案を受け入れるよう心がけている。又、月一回スタッフ会議する中で、いろいろ意見交換している。	毎月一回のスタッフ会議は、ホームの全職員が参加し、日々のケアの振り返り・決まりごとの確認、情報共有等を行っている。日勤帯の勤務時間変更に伴って、影響を受けた入浴介助について、職員間で話し合い工夫しながらどうにか対応している状況が伺えた。	グループホームの特徴、求められるサービス内容等を基本として、人員体制・勤務時間を定めることが大切であり、法人の理解を得ることも必要と思われる。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	ホームは家庭的な雰囲気をもっとしている為仕事上やむおえず必要がある時は、自主的に早出や居残りをしお互い協力しあう姿勢や、急な欠勤にも対応出来るような状況を作っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護実践者研修やフォローアップ研修等に参加し、又、院内での介護研修にも参加している。グループホーム内に於いても、その都度実技指導等を行いレベルの向上を図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修や講習会などに積極的に参加し、他のホームの職員と情報交換等を行い、お互いにサービスの質の向上を図るよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	認知症で意志の疎通が難しくてもしぐさや表情を観察し、傾聴することで安心を得てもらい、本人の意思を引き出すように努めている。又、出来る限り話し易いよう日頃より雰囲気作りに気を配っている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が困っておられる事や要望等を含め、話や相談に傾聴し何でも話し易い、相談しやすい関係作りが出来るよう努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要な時は併設の病院や老人保健施設等の紹介をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	衣替えの時期には一緒に衣類の整理をし、洗濯物収納する時は一緒に直したりして親近感や信頼感を持ってもらうよう努力している。又、時間を作って雑談をし歌を歌ったりして共有の時間を出来るだけ作っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や電話等でいろいろな相談事や提案をお互いに受け、話し合う努力をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	以前の生活がスムーズに引き続き出来るよう、利用者や家族から今までの生活環境を聞き取り、把握した情報は職員間で共有し、それが生かされる様努力している。	毎月の利用料は、家族がホームに持参することを基本としており、全ての入所者家族が少なくとも毎月一回は面会に訪れることになっている。しかし、家族以外の馴染みの人や場との関係継続支援は見られなかった。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者一人一人の時間やペースを大切にしながら、閉じこもらない様に声かけしリビングでの時間を多く持つよう努めている。又、お互い気の合った方を同テーブルにして更に会話が進まれる様努めている。一寸した事で言いあいになった時お互いの言い分をよく聞き、納得されるよう話し合いをします。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設病院への入院時は必ずお見舞いに行き不足品等に気遣い、遠くなければ他の病院へも見舞うよう努めている。家族とも電話で状態の報告等も取り合っている。 ⁸		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや希望・意向に出来るだけ傾聴し、それに添うように努めている。困難な場合にも、家族に協力して頂き本人の思い等を引き出すよう努力している。	入所後の暮らしぶりを観察しながら、時間をかけて思いや意向を把握することとしている。しかし、これまでは、思いや意向を把握するための具体的・積極的な取組が行われてるようには見られなかった。	思いに沿ったその人らしい生活を大切にするために、どのようにしたら良いか、職員で検討し、取組を始めることを期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日常の会話の中からいろいろと情報収集したり、家族に尋ねたり、又、居宅ケアマネジャーから今までの生活の情報を得たりして、これまでの暮らしの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別記録を充実し、活用し、申し送り等で洩れなく通達して、職員全員が情報を共有するよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日頃の生活態度や会話のなかで、気付いた事や感じたこと、家族から聞いたこと等を話し合い、家族の要望等も介護計画に反映するよう努めている。	3か月ごとにサービス担当者会議を開催し、深夜・日勤・準夜職員が記録した利用者ごとの状態・状況を参考に、ケアプランの見直しを行い、6か月ごとにケアプランを作成している。	思いが反映されたケアプランの作成と、その人らしい生活を支援するために、更なる努力が必要と思われた。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録を充実して個別性を高め、申し送り時に職員間で話し合い、確認し合い、実践や介護計画の見直しをその都度、又は3ヶ月後、6ヶ月後と行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設の病院や老人保健施設と連携し、行事を共同で行うなど多機能性を活かすよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員、ボランティア、警察、消防、教育機関との協力や、介護支援センターのケアマネジャー、地域包括支援センターとの情報交換など行って得た情報を、支援に活かすよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	併設の病院をかかりつけ医とし、総合的医療を受けられ、急変時や夜間にも対応できることで家族の安心感を得ている。	入所時は、母体医療法人で検診を行っている。かかりつけ医の決定は、本人と家族の希望が尊重されているが、通院や急変時等への対応を鑑み、現在では全ての入所者が母体医療法人の医師をかかりつけ医としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	グループホームに看護師が常勤しており、介護職との報告・連絡・相談に努め、必要時には併設病院に即、受診出来るよう外来看護師と情報提供・相談を常に行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には、病院関係者と診療情報や生活情報の交換を密に行っている。又、母体法人の病院の外来看護師はグループホーム9名を日頃の情報交換で、よく把握されているので心強く思っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化された場合は母体法人の病院で対応する方針であることを、入居時、契約書に於いて利用者及びご家族に説明しており、ホームでも看取りは行っていない。でも、病院対応に至るまでの期間は出来る限りの支援に努めている。	重度化や終末期の在り方として、ホームでの看取りは行わず、隣接する母体医療法人の病院で対応することを方針としており、契約時に説明を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	申し送り時やホームの勉強会に於いて、個人個人の持っておられる病気に対して急変したらどのようなようになるか？その時最初にすべき処置等を話し合い、対応の仕方を皆で把握しあっている。又、対応マニュアルも作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	広域消防本部に連絡し指導を受け、法人全体で年2回消防訓練をし、職員の協力体制を図っている。ホーム独自でも、消防署城南支所の所長他3名と民生委員2名の方の参加を頂き、2ヶ所の窓からの避難訓練を行った。	毎年2回、法人全体で実施される消防訓練に参加することに加え、ホーム独自の避難訓練を実施している。運営推進会議で避難訓練計画を検討し、実施後の反省も行っている。熊本地震の際は、建物への被害もあったが、全員無事の避難となった。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報保護に努めている。声かけは「ちゃん」付けせず、個人名で呼んでいる。入浴、排泄時は充分羞恥心に配慮し対応している。又、トイレ誘導時は個人の側まで行き、小声で伝えるなど羞恥心に配慮するよう心がけている。	トイレ誘導時の声掛けや、排泄介助時に羞恥心へ配慮しているとのことであったが、毎月実施されている体重測定は、着衣せず行われていた。「ひとり一人を尊重し、その人らしい生活を大切にします」と掲げられた理念の実現に向けて、個人の尊重・プライバシーの確保・羞恥心への配慮等について話し合い、現状を振り返ることも必要と思われた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個人個人とコミュニケーションを多く取り、お互い話しやすい関係を構築し、くつろいだ雰囲気の中で、本人の思いを訴えたり自己決定出来るよう努めている。 5/8		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の思いや状態・体調を考慮し、満足感を得てもらうよう個別性のある支援を行っている。又、行事やレクリエーション参加等は利用者の意思を尊重している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や入浴時は、本人の希望を聞いて洋服を選べるようにしている。毎木曜日に併設の老人保健施設で行われる理美容サービスを、本人や家族の希望時利用している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	菜園で育てた野菜を調理し摂取能力に合った食形態で食べられている。自分で下膳出来る方には手伝ってもらっている。食材の準備としては、ピューラでニンジン・大根の皮むき、配膳の準備ではテーブル拭きからお盆並べ、食事前エプロン配りなどしてもらっている。	法人の所有する菜園で栽培された種類豊富な旬の野菜をたっぷり使用した、家庭的な食事が提供されている。3時のおやつは手作りを心掛けており、入所者に喜ばれている。	一人ひとりの好みや食べたい物などを聞き取り、メニューに加えると、更に食事が楽しいものになると思われる。自立して食事が出来る入所者も全て同じように食べこぼし用エプロンを装着することが必要なのか、家庭的な食事、楽しい食事等の視点から振り返るのも良いかと思われた。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	寒天やお茶ゼリー、フルーチェやフルーツジュース等で水分を補い、栄養の面では治療食について管理栄養士の指導を受ける事もある。又、夜間はトイレ起床時を利用して水分2～300mlは必ず摂取してもらう為にも一人一人のコップにお茶を準備し、申し送りの時水分摂取量の報告をして貰っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、能力に合わせた口腔ケアを行っている。就寝前の口腔ケアには、必ずイソジンガーグル液を使用してもらっている。これは、地震後の避難先でも水が出なかったので、なお更継続して行った。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンによる時間指導や、食事前、就寝前の声かけ等で失敗をへらし、排泄動作も自分で出来る場所はして貰っている。出来る限り持参のオムツ類が消耗しないよう努力している。又、一ヶ月にどの位消費しているかわかるように表につけて管理している。	毎朝の申し送り時に利用者の排泄状態を共有し、一日が快適に過ごせるような排泄支援に努めている。また、家族が持ち込むオムツの数と使用数を記録し、無駄が生じないように在庫管理を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の確認を朝・昼の申し送り時に必ず行っている。体温表に洩らさず記入するよう心がけている。繊維性の多い食品を食事メニューの材料に取り入れたり、水分を多めに取ってもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	バイタルサインを確認して、異常がなければ自由入浴を原則としている。一度に一人ずつの入浴でプライバシーに配慮している。	現在の勤務時間帯での人員配置では、1日2人づつしか入浴介助が出来ないため、入所者は、4日～5日に一度の入浴となっている。尚、園内で育つ晩白柚の皮を入れたり、菖蒲湯を行なう等、季節を味わう入浴支援に努めている。	少なくとも週に2～3回の入浴支援があると良いと思われる。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はいつでも自由に休憩をとられたり、夜間の夕食後は消灯まで自由にテレビを観てもらったりして自分が休みたい時に申し出られるよう自由にしてもらっている。又、部屋の明るさや室温にも考慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	外来受診し処方があると、薬剤師より情報を得て必ず薬の名前・どんな薬か・作用・副作用をスタッフに伝えることにしている。服用時は服薬確認を必ず行っている。又、毎日状態確認を行い、異常発見に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌の好きな方、得意な方は歌集を渡して歌っていただいたり、お手玉が上手な方には皆さに披露してもらったり、特に特技持たない方でも、皆さん一緒に玄関の外で小高い所から畑や遠い景色を見て頂き、外気浴しながら楽しんで頂いています。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	併設施設の行事に参加したり、敷地内の菜園・動植物園に行ったり、お天気の良い日はひなたぼっこしたりしている。家族面会時は一緒に外出されたり、盆正月の一時帰宅など機会作りを努めている。	外出は、家族支援で行われており、ホーム職員による日常的な外出支援は実施されていないように見られた。ホーム利用者の外出支援に、法人の協力・サポートを得るための工夫も期待したい。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族が現金を持たせるところと、預かり金として置いていかれるので、ノートで管理しそれから必要なお金を出費するの二通りです。ほとんど後半です。		
51		○電話や手紙の支援	本人の希望があれば、先方の迷惑にならない時間帯に電話を取り次いでいる。耳の遠い方はメモ紙に書いていただき面会時に手渡すこともある。 7/8		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム自体桜の木に囲まれているので、春は玄関の外にテーブル出して桜の花を觀賞しながらお茶したり、秋はススキを取ってきてテーブルに飾ったり、バラ園のバラを玄関に並べて花を楽しんでもらったり、家庭的な温もりのある雰囲気・空間作りに努めている。	敷地内に桜の木、ブルーベリーや晩白柚などが育てられており、居ながらにして季節が感じられる環境となっている。リビングの窓から広がる田園風景に開放感がある。居室部分とリビングが離れた設計となっており、自室で休息をとる際は、静かな環境となっている。	理念に掲げられている「家庭的な雰囲気」を実現するために、リビングの設え等に更なる工夫があると更に良いと思われた。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	6ヶ月に一回程度テーブルを並べ変えたりして変化をつけ、気の合った者同士ばかりでなく、一人ぼっちの方にも皆さんが声かけしやすいように、又、全体が見えるようにテーブルの工夫などしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具や今まで身近に置かれていた愛着のあるもの等の持ち込みを容認している。位牌を持参され毎日お水をあげておられる方や、ご主人と自分二人が写っている大きく引き伸ばした写真をクローゼットの中に納められていて、毎日ご主人に話しかけておられる。	整理タンスやテレビ、デスクが持ち込まれ、家族の写真を飾ったり、ベッドには大好きな猫のぬいぐるみが置かれたり、其々の居心地を大切に、家族と協力した居室づくりとなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗濯物をたたんでいただいたり、掃除が出来る方にはホウキを渡して一緒に玄関の外を掃除したり、下膳出来る方には安全に下膳出来るよう気配りし、立位可能な方には自分の前だけでも立ってテーブル拭いてもらったりして、出来る限り自立した生活が送れるよう工夫している。		